



3月30日(土)、ロシア語会議通訳者として知られる徳永晴美先生の講演会『ロシアと日本の狭間でー通訳コミュニケーションの体験から』が行われた。今月までNHKラジオ『まいにちロシア語(応用編)』の講師でもあり、会場は満員、立ち見まで出た。鋭い語り口と痛快なユーモアに溢れる講演は、異文化と体当たりで勝負してきたプロフェッショナルの姿を映していた。

図らずも日本での進学を断念しモスクワ・ルムンバ大学へ。留学はカルチャーショックの連続。大戦で2,800万人余の犠牲者が出たソ連で、男性の代わりに女性が過酷な鉄道労働に携わっていた。結婚適齢期に周囲は男性皆無で「独身を受け入れざるを得なかった」と授業中涙ながらに語る恩師の人生を目の当たりにする。またあるときは、風呂敷包みを持ってロシア人から「お前は乞食か?」と言われ、得意のバレーボールで掛け声をかければ「黙ってプレーしろ」。自分の常識が覆され、頭が柔軟に物事の相対性を受け入れるようになった。実家への手紙には、「もうそちらではこたつが働いている(=работает)季節ですね。」ソ連人学生と共に全科目をロシア語で学ぶうちに思考もロシア語化していったということだ。今もロシア語脳で考えて話しているという。

帰国後、通訳を始めると今度は日本語と葛藤した。日本語は表面構造と深層構造の乖離が大きく、字面を訳しても意味不明になる。例えば「やっぱり日本人はマグロだね(日本人=マグロではない)」「夜中に何度もトイレで目が覚める(話者はトイレで寝起きしない)」。文字通りの解釈で済むか否かは、公式会議や外交交渉時の重大な論点だ。かつて英語でも会議用語や公的なスピーチパターンの資料は僅少だった。そこで先生は実地経験を元に『ロシア語通訳読本』『ロシア語通訳コミュニ



ケーション読本』を相次いで出版。誰かが作った道でなく、日本人による専門的ロシア語通訳という前人未到の領域での研鑽が、ゴルバチョフの国連演説同時通訳、エリツインの北方領土問題討論の通訳等、センシティブな場での巧みな橋渡しを可能にしたのだ。

実学分野のみならず、トルストイ『復活』の一場面が、いくつかの翻訳と映画の同シーンと共に紹介された。カチューシャは男が去った瞬間、傍

の少女(её)を抱きしめたのではない。頭(её=女性名詞)を抱えて「行ってしまった!」と叫んだのだ。ロシア語を理解する時は必ず、誰かの翻訳を真似たり日本人の発想で決めつけず、自分の前提を疑いつつ、できる限り原文の内容そのものをありのまま受け取る作業に徹せねばならない。

引退も視野に、と仰ったが、ロシア語コミュニケーションにかける情熱はまだ半端ない。そんな徳永先生はとてもカッコよかった。

個人的な話だが、私が最初にロシア語を勉強したのは小学生の時。シルクロード(当時ソ連領)を旅したくてNHKテレビ『ロシア語会話』を見始め、その講師が徳永先生だった。その後ロシア語は断念したが、先生に教わったキリル文字と発音と前置格は忘れなかった。縁あって最近、勉強を再開した。ロシア語が扉を開いた世界は大きく、先生がおられなければこの喜びはなかったと思う。

講演後、著書『携帯版ロシア語会話とっさのひとこと辞典』に先生のサインをねだった。「これ買ってくれたんだ! (多く出回っていないから) だいが高値だったんじゃないの?」とおどける先生。お会いできて本当に嬉しかった。ありがとう、徳永先生。忘れられない一日になった。